



Title	金崎春幸教授・春木仁孝教授退職記念号刊行にあたって
Author(s)	和田, 章男
Citation	Gallia. 2017, 56, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69826">https://hdl.handle.net/11094/69826</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 金崎春幸教授・春木仁孝教授退職記念号刊行にあたって

本年3月末日をもって、大阪大学言語文化研究科の金崎春幸教授と春木仁孝教授が定年退職されます。金崎先生は大阪大学で35年間（文学部助手時代の1年を含む）、春木先生は36年間の長きにわたってフランス語教育を中心に教鞭をとられるとともに、それぞれフローベール研究者として、またフランス語学者として多大な研究成果をあげてこられました。学生時代から今日に至るまで、両先生はまぎれもなくわれわれの世代のリーダーでした。

大学院時代の金崎春幸先生の研究発表は当時の大学院生たちの注目の的でした。フローベール『三つの物語』の見事な構造分析は圧倒的で、文学研究の面白さと深さを教えられるとともに私の手本であり、また憧れでした。教員になられてからも毎年1本ずつ、決して急ぐことなく着実に新たな論考を発表し、それらの集成として博士論文を完成、そして2014年に『フローベール研究—作品の生成と構造—』を刊行されたことは、多くの研究者に金崎先生の論文を読んでもらいたいと願っていた私にとっても喜ばしいことでした。優秀な研究者は実務や運営業務においても優れているのか、温厚で謙虚な人柄にも関わらず、金崎先生は言語文化部長、評議員そして言語文化研究科長と重要な役職を歴任され、その正確で緻密な運営能力と適格な判断力によって見事なリーダーシップを発揮されたことは誰しも認めるところです。

さらに雲の上の人であったのが春木仁孝先生です。フランス政府給費留学生、2年間で博士号取得、帰国早々に言語文化部へ着任、まさに俊才としてのキャリアを進んでおられるのを遠く仰ぎ見ていたものでした。古フランス語の研究から始めて、フランス現代小説の語学的分析に至るまでのその豊穣な言語学的関心の広さは驚くほどで、特に過去時制やアスペクトの研究は、文学テクストを読解する上でも大いに有益なものです。しかも研究一辺倒ではなく、その趣味は映画からスポーツまで実に多彩で、人の数倍の人生を歩んでおられる感があります。言語学はともすると門外漢には近寄りがたいところがありますが、春木先生をはじめとする日本のフランス語学者が編纂されている『フランス語学の最前線』のシリーズは画期的な論集です。言語に関する知はやはり人文学の基礎をなすものだということが今更ながら痛感します。

金崎先生と春木先生は、本文学会および『ガリア』の編集に大きくご尽力いただいたことは言うまでもありませんが、卒論・修論・博論の審査および文学部・文学研究科の授業担当もお願いしており、金崎先生にはフローベール作品についての講義、そして春木先生には毎年中世フランス語の文献を使った古フランス語の授業を担当いただいたことは、フランス文学専修・専門分野にとって大変ありがたく、学部学生のほとんど全員が受講するほど人気のある授業でした。全国的にも珍しいほどに、文学部・文学研究科で中世から現代に至るフランス文学の幅

広い授業を提供できるのは言語文化研究科の先生方のご協力のおかげです。両先生の授業がなくなるのは大きな痛手ですが、ガリア研究会等を通じて今後も後輩たちへのご指導とご助言をいただければ幸いです。

(和田章男)